

独思録：「衆院選の情勢」(8/23)

小西 秀俊

esq-info@esquare-kamakura.net

日経や読売の第45回衆院選全国情勢調査によると、今度の衆院選では全480議席のうち民主党は小選挙区と比例代表を合わせて単独過半数(241議席)を突破、300議席超が当選圏に入っていると伝えています。

現状では、自民党は100議席弱の当選圏にとどまり、公示前の議席数に比べ半数以下に減らすのは必至の情勢であり、民主党圧勝による政権交代の可能性が強まっていると言っています。

しかし、300の小選挙区と180の比例代表で、まだ、2割前後の有権者が投票先を決めておらず、投開票日に向け流動的要素も残っているとしています。

今回の衆院総選挙、前回の小泉旋風を起した郵政選挙の裏返しのワンフレーズ「政権交代」選挙の気配です。各党マニフェストを掲げておりますか、各紙の評論家諸氏は、将来の国家像どころか、中長期ビジョンすら国民に記されていないと評しています。

確かに、各党は将来の国家像・中長期ビジョンを描くための基盤となるイズムというものがないようです。

夏目漱石は「イズムの功過」の中で、

「大抵のイズムとか主義とかいうものは無数の事実を几帳面(きちょうめん)な男が束(たば)にして頭の抽出(ひきだし)へ入れやすいように拵(こしら)えてくれたものである。一纏(ひともと)めにきちりと片付いている代りには、出すのが億劫(おっくう)になったり、解(ほど)くのに手数料がかかったりするので、いざという場合には間に合わない事が多い。大抵のイズムはこの点において、実生活上の行為を直接に支配するために作られたる指南車(しなんしゃ)というよりは、吾人(ごじん)の知識欲を充たすための統一函である。文章ではなくって字引である。

同時に多くのイズムは、零碎(れいさい)の類例が、比較的緻密(ちみつ)な頭脳に濾過(ろか)されて凝結(ぎょうけつ)した時に取る一種の形である。形といわんよりはむしろ輪廓(りんかく)である。中味(なかみ)のないものである。中味を棄てて輪廓だけを畳(たた)み込むのは、天保銭(てんぼうせん)を脊負う代りに紙幣を懐(ふところ)にすると同じく小さな人間として軽便(けいべん)だからである。」

と言っており、芥川龍之介も「イズムと云ふ語の意味次第」の中で、

「イズムを持つ必要があるかどうか。かう云ふ問題が出たのですが、実を云ふと、私(わたし)は生憎(あいにく)この問題に大分(だいぶん)関係のありさうな岩野泡鳴(いはのほうめい)氏の論文なるものを読んでみません。だからそれに対する私の答も、幾分新潮(しんてう)記者なり読者なりの考と、焦点が合はないだらうと思ひます。

実を云ふとこの問題の性質が、私にはよくのみこめません。イズムと云ふ意味や必要と云ふ意味が、考へ次第でどうにでも曲(ま)げられさうです。又それを常識で一通りの解

<夏目漱石（1867-1916）>

小説家、評論家、英文学者。俳人（俳号は愚陀仏）。本名、金之助。江戸の牛込馬場下横町（現在の東京都新宿区喜久井町）生まれ。森鷗外と並ぶ明治・大正時代の文豪。

大学時代に正岡子規と出会い、俳句を学ぶ。帝国大学（後の東京帝国大学）英文科卒業後、松山中学などの教師を務めた後、イギリスへ留学。

帰国後東大講師を勤めながら、『吾輩は猫である』を雑誌「ホトトギス」に発表。これが評判になり『坊つちやん』『倫敦塔』などを書く。その後朝日新聞社に入社し、『虞美人草』『三四郎』などを掲載。当初は余裕派と呼ばれた。

その他『行人』『こゝろ』『硝子戸の中』『明暗』など。



<芥川龍之介（1892-1927）>

小説家。号は澄江堂主人、俳号は我鬼。東京市京橋区入船町生まれ。東京帝国大学文科大学英文学科卒。

1916年12月より海軍機関学校の嘱託教官（担当は英語）として教鞭を執るかたわら創作に励み、翌年5月には初の短編集『羅生門』を刊行、その後も短編作品を次々に発表し、11月には第二短編集『煙草と悪魔』を発売。1918年、教職を辞して大阪毎日新聞社に入社。

その作品の多くは短編で、『芋粥』『藪の中』『地獄変』『歯車』など、『今昔物語集』『宇治拾遺物語』などの古典から題材をとったものが多い。また『蜘蛛の糸』『杜子春』など、童話も書いている。

芥川の業績を記念して菊池寛が芥川龍之介賞を設けた。



春秋：「衆院選公示」(8/20)

「雨にも強くいつでも安心」「ズレ落ち防止機能付き」「素材は綿にビニール加工」。はて何の広告かという、選挙用のタスキの売り込み文句だ。たしかにあれは立候補者の必需品。ある業者は「タスキは選挙の生命線」と物々しい。

衆院選が公示され、そんな特注品を着用に及んだ候補たちが駆け巡っている。思えば不思議な光景だが、タスキというのは記紀神話にも登場する古い言葉だという。それを肩に掛ければ神の代理として祭事を司(つかさど)ることができる信じられたらしい。木村紀子さんの「原始日本語のおもかげ」という本に教えられた。

残念ながら、目下の選挙戦では神に成り代わってまつりごとを引き受けようというほどの厳粛さは見あたらない。マニフェスト対決、とはいうけれど現場の候補者は自分の名前を投票用紙に書いてもらうのに必死の形相だ。連呼、絶叫、懇願が盛り場に住宅街に響き渡り、遅れてやって来た夏がますます暑くなる。

各地で接戦が伝えられるだけにそれも致し方ないが、タスキを掛けたからにはもう少し政治の夢を語ってもらえないものか。木村さんの著書によると古代にはネックレスのような玉ダスキというものもあり、こちらは人の心を吸い寄せる効果があったという。玉ダスキに掛け替える候補者が出てくるかもしれない。

< 木村紀子 (1943-) >

愛媛県松山市出身。奈良大学教授。

奈良女子大学文学部卒業。専攻は言語文化論・意味論。

平安貴族が400年にわたって愛唱した古謡である催馬楽を研究、現在すでに見失われ、以来定説のないままの歌意の綿密な考証を行っている。

著書に『催馬楽』の他、『原始日本語のおもかげ』『ヤマトコトバの考古学』『古層日本語の融合構造』など。



鶯宮の催馬楽神楽

天声人語：「選挙檄文」(8/20)

さすがはエスプリの国と言うべきか、フランスに『楽天家用小辞典』なる書物があると仏文学の河盛好蔵が書いている。かつて小欄でふれたが、様々な事柄を皮肉たっぷりに定義していて、たとえば「約束」は「選挙のときに使われる小銭」となる。

さらに、「漠然とした約束は拒絶の最も丁寧な形式である」「約束を守らない人間にもあまり厳しくしてはならない。彼らは希望の種をまく人だから」とワサビをきかす。選挙に向けた各党のマニフェストを眺めていて思い出した。

民主党は「高校授業料の無償化」や「子ども手当」「高速道路の無料化」などを打ち上げた。待ち望む人はいるだろうが、実を結ばせる財源は大丈夫か。辞典のように寛容にならず、ここはひとつ厳しい吟味が必要だ。

片や自民党は、「10年で家庭の所得を100万円増やす」を売りの一つにする。おいしそうだが漠然としてはいないか。かつて「この程度の約束を守らないことは大したことではない」と言った某元首相の声が、どこからか聞こえてくる人もいるだろう。

英国が発祥のマニフェストが日本に紹介されたのは、実は古い。119年前の第1回衆院選の際に「選挙檄文(げきぶん)」と翻訳されたそうだ。「檄」には主張を広く知らせ、決起を促す意味がある。

「投票用紙で武装して、蜂起する日が近づいてきた」と豪州在住の作家、森巢博さんが小紙に寄せていた。歴史的とされる選挙。蜂起までに公約の虚と実、真と偽をとくと見定めるとしよう。かつがれました、では子孫(こまご)の将来にも申し訳がない。

<河盛好蔵(1902-2000)>

フランス文学者・評論家。文学博士。大阪府堺市出身。京都帝国大学仏文科卒業。関西大学でフランス語を教える。仏文学者としてはモラリストの著作を日本に紹介。

1928年、学校騒動で関西大学を辞職して渡仏し、ソルボンヌ大学に学び、戦後は東京教育大学、共立女子大学などで教鞭をとる。

著書に『新釈女大学』『人とつきあう法』『パリの憂愁 ボードレールとその時代』『老いの物語』『ふらんす小咄大全』『藤村のパリ』など多数。



<森巢博(1948年-)>

作家。石川県金沢市生まれ。都立豊多摩高校卒業。

漫画雑誌編集者や記者を経て、現在はオーストラリアを本拠地に執筆活動を行っている。

著作に『博奕の人間学』『無境界の人』『無境界家族(ファミリー)』『ろくでなしのバラッド 人間は賭けをする動物である』『神はダイスを遊ばない』『ジゴクラク』など。



編集手帳：「政治の季節」(8/18)

年配の時代劇ファンならば、旗本退屈男の額に残る傷あとを思い出すかも知れない。「パッ、天下御免(ごめん)の向こう傷」。弓形の冴(さ)えた月が夜空に懸かっている。江戸期の俳人、田舎女(でんすてじょ)に、三日月を釣り針に見立てた一句がある。出て見よと人釣り針が三ヶの月。月を見に出ておいで。人を釣っては戸外に誘い出すような月であることよ、と。

解散からやけに長く感じられた前哨戦も終わり、きょうは衆院選の公示である。餌の甘言をちりばめた人釣り針ならぬ“票釣り針”が隠されていないか、投票日までじっくり、候補者の声に耳をすますとしよう。

旗本退屈男のせりふにある「向こう傷」とは体の前面に受けた傷をいう。敵に正面から立ち向かった証しである。景気、年金、財政、安全保障と難題ぞろいのいま、ともかくも逃げない人を、政党を選ぶほかあるまい。

三日月を釣り針ではなく、研ぎ澄ました匕首(あいくち)に喩(たと)えたのは俳人松本たかしである。雪嶺(せつれい)に三日月の匕首(ひしゅ)飛びりけり。なかには劣勢で、刃の感触をひんやり首筋に感じている候補者もいるだろう。悲劇あり、喜劇ありの「政治の季節」である。

< 旗本退屈男 >

小説家・佐々木味津三原作の時代小説および同作品に登場する主人公・早乙女主水之介(さおとめもんどのすけ)の異名。

元禄時代に活躍した直参旗本で、無役ながら1200石の大身。剣術の達人で「諸羽流正眼崩」という無敵の剣術を習得している。その他にも武芸十八般に通じ、軍学にも明るい。しかし太平の元禄の世にあっては腕を振るう機会に恵まれず、口癖のように「退屈で仕方ない」と公言している。

トレードマークは額に受けた三日月型の「天下御免の向こう傷」。これは長州藩の悪侍7人組と斬り合った時に受けた刀傷。小説では胆力と剣技、そして額の傷を「天下御免」としているが、映画では徳川將軍より天下御免の御墨付きを受けたという設定になっている。



< 佐々木味津三 (1896-1934) >

小説家。愛知県北設楽郡下津具村(現・設楽町)出身。明治大学政経科卒。

雑誌記者のかたわら小説を書き、1919年『大観』に載せた「馬を殴り殺した少年」で菊池寛に見出される。『右門捕物帖』『旗本退屈男』など主に江戸時代を舞台にした時代小説を発表。

佐々木の代名詞ともなった作品『旗本退屈男』は、昭和初期から現在に至るまで度々映画やテレビドラマ化され高い人気を得た。

著書に『呪はしき生存』『兄馬鹿』『女讐夜話』『虐られし人々 ドストイェフスキ』『二人の異端者』など。



< 田捨女 (1634-1698) >

江戸時代の女流歌人(俳諧、短歌)。丹波の国氷上郡栢原村本町生まれ。

幼年より、父と兄の影響で俳諧と和歌を学び、才能を発揮。師は芭蕉の師匠でもある、北村季吟など。

その才能は城主に知られ、16歳の時に栢原城主「織田信勝」より「かやはらに(栢原に) おしや捨ておく 露の玉」と賛美された。

6歳で詠んだ「雪の朝 二の字二の字の 下駄のあと」は有名。



余禄：「選挙力」(8/21)

往年の名横綱・双葉山は技量や体力が特に優れていたわけではなかった。にもかかわらず不滅の69連勝や幕内全勝優勝8回、5場所連続全勝などの大記録を残せたのは「相撲力(すもうぢから)」があったからだという。

双葉山は自著で「腕力にかけてはむしろ弱い方だったといってもよいでしょう。……相撲力というのは下腹と腰から出てくる力 - - 要するに体全体から出てくる力で、訓練により体力の充実に伴って備わってくるものです」と語っている(「横綱の品格」ベースボール・マガジン社新書)。

衆院選の舌戦で自民党の麻生太郎総裁が「責任力」なる言葉を使っている。聞き慣れない熟語だが、意味するところは「景気最優先」「安心社会の実現」「日本を守る」などの公約を実行する力が私たちの党にはある、ということのようだ。

ライバルの民主党の鳩山由紀夫代表はこれを逆にとり「責任力というなら皆さんの一票の力によって責任を取ってもらおうではありませんか」と呼びかけている。どちらのアピールが有権者の心に響いているだろうか。

衆院解散から投票日まで40日という期間は現在の憲法下では最も長い。それも残すところ10日を切り夏の政治決戦は事実上最終コーナーに入っている。政権の継続か交代かがかかった歴史的な選挙とあって、党首たちの演説ぶりも日々激しさを増している。

「政権選択」にせよ「政策選択」にせよ、問われているのは訴える側に有権者を説得する力がどれだけあるかだ。それが政党の「選挙力(せんきょぢから)」というものだろう。「相撲力」が体全体から出てくる力なら、「選挙力」は政党と有権者の信頼関係から生まれてくるはずである。

< 双葉山定次 (1912-1968) >

第35代横綱。本名龜吉定次。大分県宇佐郡天津村布津部(現在の宇佐市下庄)出身。

少年時代の負傷が元で右目が半失明状態だったことや、事故で右手の小指が不自由といったハンデを抱えながら、「双葉の前に双葉無し、双葉の後に双葉無し」の言葉のようにまさに不世出の大横綱であり、相撲の神様と呼ぶ人も居るほどで、名実共に史上最強の横綱であるとする評は多い。

年2場所の時代の本場所での通算69連勝、優勝12回、全勝8回などの記録は、未だに破られていないものも多い。

